



春燈

12月号

December 2014

主宰の句

安立公彦

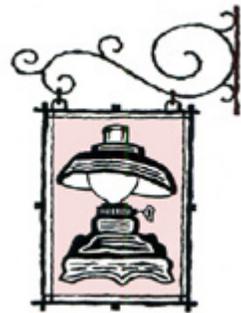
木戸閉めに出づる夜寒の石畳

松茸の小ぶりを愛づる祝膳

安心のひと日や秋の麒麟草

坐して酌む菊酒父のごとかりけり

渡り鳥仰ぎし夜の深ねむり



安住敦の句

夕爾忌のつくつくほふし遠い木に

『柿の木坂雑唱以後』平成二年

敦が夕爾を詠んだものは四十九句あるが、夕爾存命中のものはない。『柿の木坂雑唱以後』にへ夕爾の忌歳々迎へわれら老ゆゝの句も見える。夕爾が五十歳で没後敦は終生句友として敬愛した夕爾を悼む句を詠んだ。本句の「つくつくほふし遠い木に」の措辞に夕爾亡きあとも想いを馳せる敦の心情が吐露されている。ことし、木下夕爾生誕百年、没後四十九年を迎えた。

鈴木直充

安住敦の句

死はある日忽然と来よ傘雨の忌

『柿の木坂雑唱』昭和五十三年

敦の自註句集に「どうせ死ぬんなら長患いしないでぽっくり死にたいものだ」と先生はしみじみ言い、それを肯った」とある。ひたすら万太郎の遺志を継ぎ、万太郎の「春燈」を継承することに心を尽くした敦の、師への深い敬慕の念が溢れる中にも凛然たる美意識が感じられる。この時敦はまだ七十歳。

藤原若菜

燈下集



○ 生姜市老いの一徹貫けり

幽かなる山脈越ゆや牧水忌

大花野夢二のをんな立たせたり

糸瓜忌や双手で掬ふ井戸の水

生家いま物の音澄みてゐたりけり

○ 割田容子

○ 全開の校舎の窓や秋高し

湯の街や売家の軒の秋風鈴

鯛のこゑしみわたる心字池

高説を素直に聞くや生身魂

徘徊は人にもあるや穴まどひ

○ 小泉貴弘

○ 林紀夫

稲の秀や海へ傾るる千枚田

稲の香や容やさしき筑波山

下山後のいのちの水や法師蟬

虚栗踏んで濁世の音聞きぬ

二合半をかるく越えたり初秋刀魚

○ 戸辺信重

明日なきと今をひたすら法師蟬

苦瓜をはずして映る高い空

腰痛の窓に蜻蛉の山だより

ガラスビル粧ふ秋をのみこめり

竜胆を手押し車に老婦人

○ 中野さき江

何の欲なしとは言へず衣被

諍ひも夫ぬてこそ夜長かな

鳥渡るうかつで済まぬ忘れごと

過去は相問はず語らずぬくめ酒

身の丈をほどに生きゆく月ひとり

○ 成田なな女

星月夜平和なる世を祈りけり

みまかりし友を悼むや夕月夜

ごん狐咲かせて行きし曼珠汝華

校庭の少女の像やカンナ燃ゆ

破芭蕉みのかさ付けし大師像

○ 栗原完爾

秋燕や根岸に古き豆腐店

鬼の子に風のしがらみ生れにけり

眠さうな空つぼのバス秋深し

かまつかや父の遺しし謡本

枝豆のきりなし八十路すぐそこに

○ 小菅礼子

好もしや引立て役の吾亦紅

贅沢は敵の青春秋澄めり

爽涼や遠き日の恋たからもの

そばの花人柄みゆる和言葉

姉兄の分も生くるや秋のこゑ

○ 生田高子

どの路地も古書の匂や秋の暮

天心のスパームーン雲さやか

総ルビの「高野聖」や鏡花の忌

連綿とこほろぎ鳴けり枕上

しばらくは戸を閉てずおく夕蝸

○ 本多遊方

老人が老人の日を祝ふかな

曼珠沙華離れ難きは此岸かな

青蜜柑大き食卓ころげ落つ

珍しや啄木鳥来る大櫓

蓑虫や延命治療可否問はる

春星賞・佳作（20句）

遊行柳

近 昌夫

灌漑の水のゆたけき清和かな

雉子鳴くや日照雨に濡るる岐れ径

旅人にしたしき遊行柳かな

草に木に光のしづく夏きざす

新緑や巖つらぬく那須疎水

犬追ひの那須の篠原青あらし

かはたれや森の奥よりほととぎす

夏木立ふもとの牛の見え隠れ

むらさきに明けゆく空や額の花

うつばりや夏炬くすぶる山の雨

草いきれ翁の道を辿りけり

朝露の径踏み分けて峠越ゆ

「白鳥来」と葉書いちまい佳き日かな

立春大吉那須野ヶ原に水の音

那須五峰仰ぎものの芽育ちけり

春田打つ若き夫婦や乳母車

下萌の小屋に仔牛の生まれけり

野火あがるもののふ駆けし古戦場

鳥帰る寂光の沼明りかな

朝ざくら山をそびちに開拓碑

春星賞・佳作（20句）

井の頭動物園

後藤眞由美

天辺の猿見上げある雲の峰

「ヒト」といふ檻に鏡のある暑さ

山あらし針をたたんで三尺寝

向日葵や象のはな子は二時上がり

山猫の仔の名投票日焼の子

動物慰霊碑隅つこに旧り擬宝珠咲く

遠雷や禽舎の上の楷大樹

鳥の餌を担いで行けり蟻二匹

鵜の足くすぐつてゐる鯉の口

玉虫やしあはせ色の光撒く

西日濃し山羊の目のはや夕まどひ

夕焼や人も獣も子を連れて

朝涼や門扉静かに開きたる

土用東風生れしばかりのモルモット

青葉木菟こころ見透かすまん丸目

カピバラに交じり水浴ぶ雀どち

緑陰や写生に邪魔の家鴨が来

白鷺のつついて揺らすひかりかな

ペンギンの水場で遊ぶはだしの子

炎天に哀叫カンムリエボシドリ

当月集

安立 公彦選



○ 中村紀美子

スカイツリーいつとき化粧ふ秋夕焼

鯿釣の人に重ぬる夫の影

さやさやと裏戸明るき竹の春

華やぎのあとかたもなき刈田かな

コスモスを背にする写真若き母

○ 藤丸誠旨

ピストルが秋天を撃つ駆けつくら

孤高とは取り残されし秋茄子

熟れし果の紅きを卓に秋灯下

街灯の海贏の子「おらあ三太」かな

長き夜の妻の眠りを誘ふ瓦斯（酸素吸入）

○ 浅木ノエ

傷つかぬために笑へり秋桜

ひよんの笛吹くや詩心呼ぶやうに

こほろぎや安楽椅子の庭を向く

美しく走る数式秋ともし

落し水峡の闇夜を奏でけり

○ 西岡啓子

大寺の雨に艶増す秋燕

青虫の草になりたる思ひかな

初鴨やわが町の川ゆるやかに

赤い羽根あるかなきかの風吹きて

雨降れば雨のこゑ聞く暮の秋

○ 齋藤晴夫

竹林を透く処暑の風厨まで

曼珠沙華狂ひなく咲き時逝かす

幼さの消えてゆく子や吾亦紅

落し水つとに流転の音聞かす

鱗雲尾は大まかに撒かれけり

春燈の句

安立 公彦選

新米炊くや光の粒の立ち上がる

播鉢の櫛目逆目に胡麻香る

はじかみの薄紅散らす五日飯

庭木刈る四方の風のほころびぬ

初鴨や寡婦として日々はじまるか

幾たびも日照雨くる日や蕎麦の花

ジューサーに葡萄の踊る朝の卓

軽井沢千のコスモス風走り

御嶽の悲報を知るや蚯蚓鳴く

鳥威し威せるうちの稲づくり

髭を剃る朝ひとときの秋思かな

次の世へ思ひつなぐか秋の蝶

九十年露の命と言ふべきや

薬石に縁なき卒寿曼珠沙華

東京 大西由美子

東京 那須 礼子

バンコク 大口 堂遊

福島 物江 康平

新米の湯気に涙や訳も無し

雨過天晴十月十日鳩の舞ふ

蚯蚓鳴く中仙道の六地藏

草叢を即かず離れず秋の蝶

コスモスや北アルプスの空晴れて

健やかに歳を忘るる敬老日

雲遊ぶ池を巡るや大花野

湿原の風と囁く草もみぢ

鏡池に粧ふ山の映りけり

城跡に色なき風の声を聴く

秋祭故郷恋しと虫が鳴く

時たまに鴉の主来る見回りに

まがる腰秋の夕日に支へられ

久かたの会食楽し菊なます

東京 池田 節

東京 河崎 國代

埼玉 原田たづゑ



余言

安立公彦

象が多すぎると薄れゆく。今の世相はまさにそういう時代となつてゐる。しかし高齢化は有難い。高齢になると医師との接触が多くなる。診察を受ける身に、医師の一言は天の声となる。患者は天の声を反芻する。この句はまさに現代社会の一場面を切り取つてゐる。己が身の病に対する希望と不安を、垣間見る秀句だ。

しばらくは全身を見ず秋の蛇

三上 程子

菊に酌みひとり生くるを寂しませ

鷹崎由未子

蛇は冬が近づくと穴に入り冬眠する「蛇穴に入る」の季語がある。「秋の蛇」はその状態に入る前の蛇。

この句の、「しばらくは全身を見ず」に、夏期の蛇の蠢きは感じられない。へ全長のさだまりで蛇すすむなり 誓子へはまさに蠢きだが、掲出句には、誓子俳句の「すすむなり」の動きはなく、冬眠に入る前の緩慢な姿があるのみ。一読哀れを誘う句だが、蛇という言葉から受ける印象とは別に、全身を見ず、の発見に興味さえ感じる句である。

秋深し医師の言葉をそらんずる

末吉 治子

榎坂にいざよふ月の上りけり

鈴木 鳳来

古来、「高齢」という言葉は、一種の尊敬さを伴つていた。それは社会の秩序の一面でもあった。現代は高齢化社会である。七十五歳以上の人が八人に一人という。尊敬さも対

作者の第二句集『故山』が上木された。平成十四年から作品を収録する充実した好著である。「あとがき」にもあるように、作者の、先師成瀬櫻桃子先生への尊敬の念は

深く、平成二十年の作にも、へ榎坂も柿の木坂も冬木の芽の句がある。榎坂は成瀬先生の住所近くの坂の名、柿の木坂は安住敦先生の住まいの町名。

この句、「いざよふ月の上りけり」に、作者の先師への追懐の思いが遍く表現されている。

十六夜の月つれて夫かへりけり 太田 慶子

九月本部句会で特々選に頂いた句。句会報にも書いたが、下五を「かへりゆく」とすると、亡くなった夫が、十六夜の月を連れて天上に帰る、という句になる。

この句は「かへりけり」。即ち十六夜の月を連れて夫君が帰宅したという句。「ゆく」と「けり」の違いは大きい。「表現」ということは、俳句成立の基本であり、同時に全てでもある。この句、「十六夜」の月の、黄色に霞む外光が、「夫」の背に大きく広がって見える。

くれなゐを夕日と競ふ曼珠沙華 青柳 雅子

秋咲く草花の中で、彼岸花ほど強烈な色彩に満ちた花はない。茎一つ花一つという形も単純で、しかも存在感は強い。更に一週間も経たない内に花は消え失せ、その茎も後を追うようにして無くなる。やがて茎のあった周りから濃い緑色の葉が伸び出す。この花、歳時記では「曼珠沙華」が季語として、傍題に「彼岸花」があるが、ヒガンバナ科

の多年草である。しかし傍題の中の、「死人花」、「幽霊花」、「捨子花」などは、この花にそぐわない。俳句には曼珠沙華が最も相応しい。

掲出句、「夕日と競ふ」が、「曼珠沙華」を実に良く活かしている。真盛りの曼珠沙華の群れが浮かんでくる。

晩年のはなやぎに似て草の花 小張 志げ

久保田先生に、へ草の花ひたすら咲いてみせにけりという戦前の句がある。先生はその自序に、「俳句について、そのときどきのおおぼえ、心境小説の素」と書いたが、として、戦争の近くなった世相に、「時代的突風の中に、せめて自分を見失うまいとして、…」と続けている。「ひたすら咲いてみせにけり」に、己の心情を失うことなく俳句に向かう、という思いが出ている。

掲出句を読み、「晩年のはなやぎに似て」に首肯した。この句に流れる一筋の思いは、久保田先生の句に通じるものがある。「草の花」の座りがみごとだ。

夫に似し雲浮いてゐる昼寝寛 和田 絢子

和田孝村さんの逝去は昨年十一月十三日。一周忌も近い。早いものだ。それは作者が一番強く感じること。この句、夫恋いを通り越して、作者の心の咬きととなっている。孝村さんの温顔が浮かぶ。作者の健勝を祈るばかりだ。